



日本の資料を世界に発信する
-国際日本文化研究センターのOCLC参加-

江上敏哲

国際日本文化研究センター

2023.10.25

@パシフィコ横浜



参考文献等

- 国際日本文化研究センター
<http://www.nichibun.ac.jp/>
- 荒木のりこ他. 「国際日本文化研究センターにおける目録・ILLの海外対応：OCLC WorldCat・WorldShare ILLによる新サービスと課題」. 『大学図書館研究』. 2019, 112.
<https://doi.org/10.20722/jcul.2042>
- 江上敏哲. 「日本からの学術資料の提供をどう実践するか：国際日本文化研究センターによるOCLC参加の取り組みから」. 『OCLC News 特別号』. 2018.6.
<https://mirai.kinokuniya.co.jp/2018/06/4006/>
- 江上敏哲. 『本棚の中のニッポン：海外の日本図書館と日本研究』. 笠間書院, 2012.5.
<http://doi.org/10.15055/00006806>



概要

- 国際日本文化研究センターは2018年より、
 - OCLC WorldCatでの目録情報の公開を開始。
 - OCLC WorldShare ILLへの参加による海外ILLの本格的な受付サービスを開始。
- この事業のねらいは、
 - 海外からのILL受付を、海外の機関・ユーザにとってスムーズな方法で受け付ける。
かつ、日文研にとって負担の無い方法で実現する。
(資料提供環境の改善)
 - 日文研所蔵資料の書誌・目録情報について、海外からのファインダビリティ/ディスカバラビリティを向上させる。
(情報発信による可視化・アクセスの強化)
 - 日文研の“海外への研究協力機能”を強化する。
かつ、日文研のプレゼンスを上げ、意義を再認識させる。

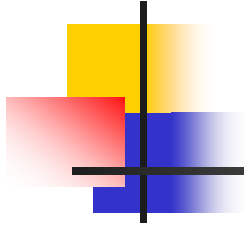


1. 日文研の紹介



国際日本文化研究センターの概要

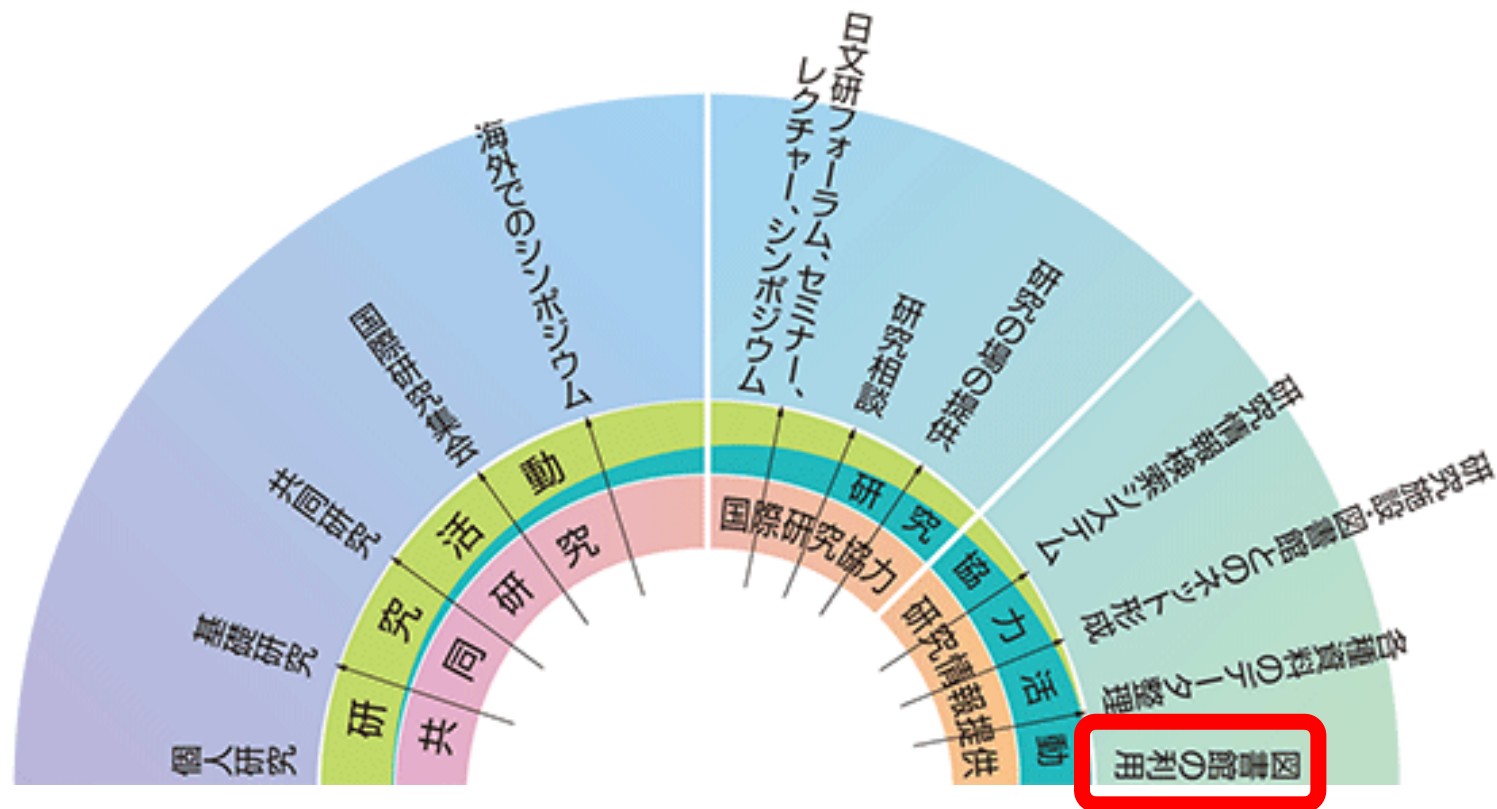
- 大学共同利用機関(人間文化研究機構)
- ① 研究活動
「日本文化に関する国際的・学術的・学際的な総合研究」
- ② 研究協力
「世界の日本研究者への研究協力・支援」
 - ・ 客員研究員・外来研究員 等
 - ・ 博士課程大学院生
 - ・ 海外シンポジウム・国際研究集会 等
 - ・ 図書館による資料提供・サービス



- 専任教員・研究者
(教授／准教授／機関研究員等 約50名)
- 博士課程大学院生
(総合研究大学院大学 国際日本研究コース
約20名 (うち留学生約10名))
- 外国人研究者
(客員／外来・来訪 年間約50名)
- 図書館来館者(2019年)
海外:約482人 (日本:447人)

図書館＝研究協力活動

- 3 世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、実情に応じた研究協力を行っています。



「HOME>日文研とは>活動」より



国際日本文化研究センター 図書館・データベース

- 蔵書 約60万冊

- 特徴ある資料の例

- ・「外書」:外国語で書かれた日本研究図書、海外で出版された日本についての本
- ・妖怪・春画等の絵巻・図版資料
- ・占領期外地の絵葉書・旅行案内・地図

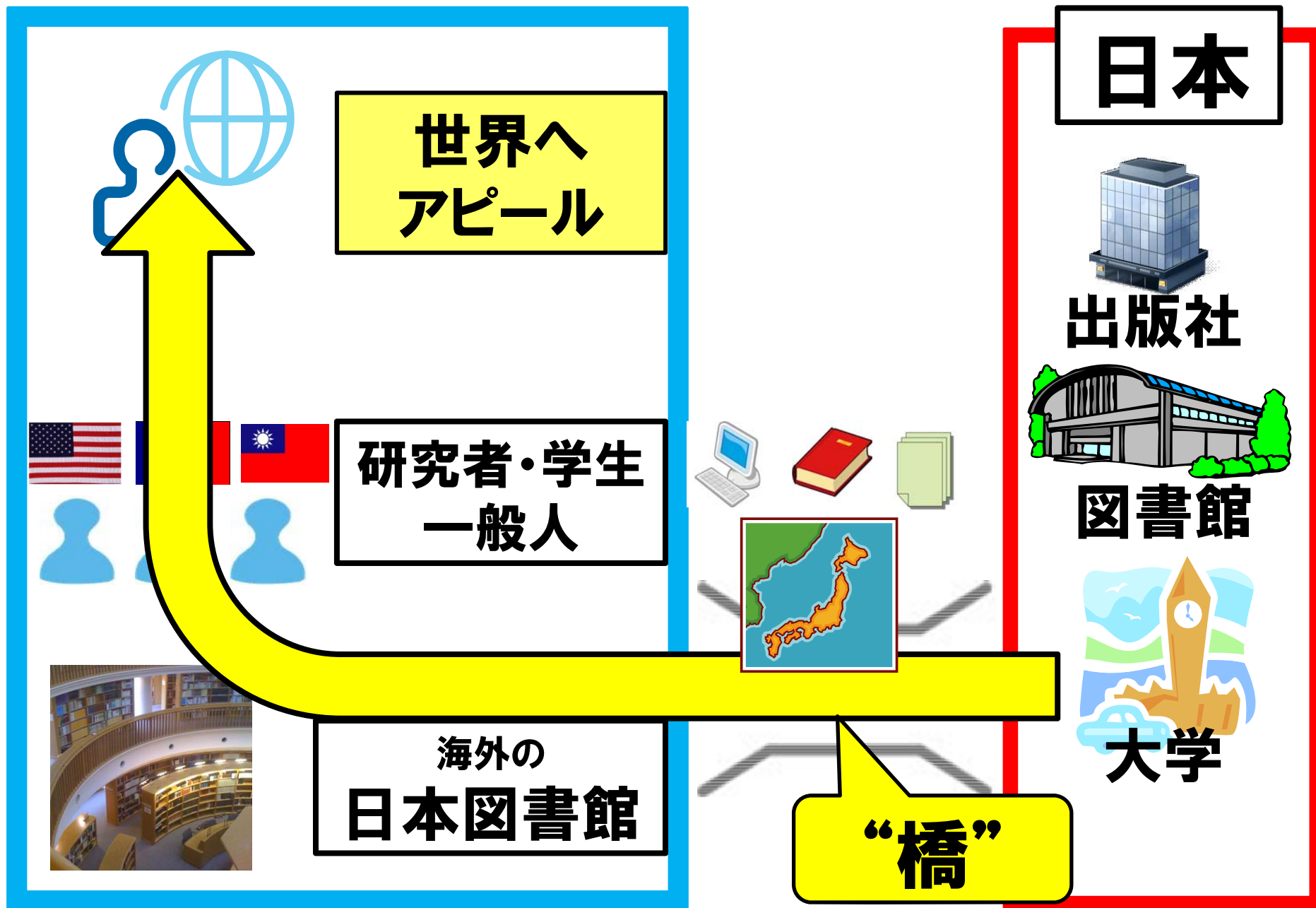
- 図像資料のデジタル化・データベース化

- ・怪異妖怪画像
- ・所蔵地図
- ・近世絵入百科
- ・艶本
- ・古写真・外像
- ・朝鮮絵はがき



2. 海外日本研究の現状・課題

「日本の資料を世界に発信する」とは



海外の日本図書館には “横のつながり”が不可欠

国会図書館	4000万冊
-------	--------

京都大学	700万冊
------	-------

日文研	60万冊
-----	------

UCバークレー	44万冊
---------	------

オックスフォード大学	8.7万冊
------------	-------

チューリッヒ大学	1.4万冊
----------	-------



日本研究の現状(1)

- 日本からの情報発信・資料提供不足
 - 電子：e-resource不足
 - 冊子：ILL/DDS態勢の未整備
 - ・ 著作権の壁
 - ・ 会計の壁
 - ・ 書誌目録情報の“孤立”
 - OCLC (=国際的プラットフォーム)上での不在
日本はNDL・早稲田等の少数(国立大学なし)
 - GIFの終了(2018年3月)



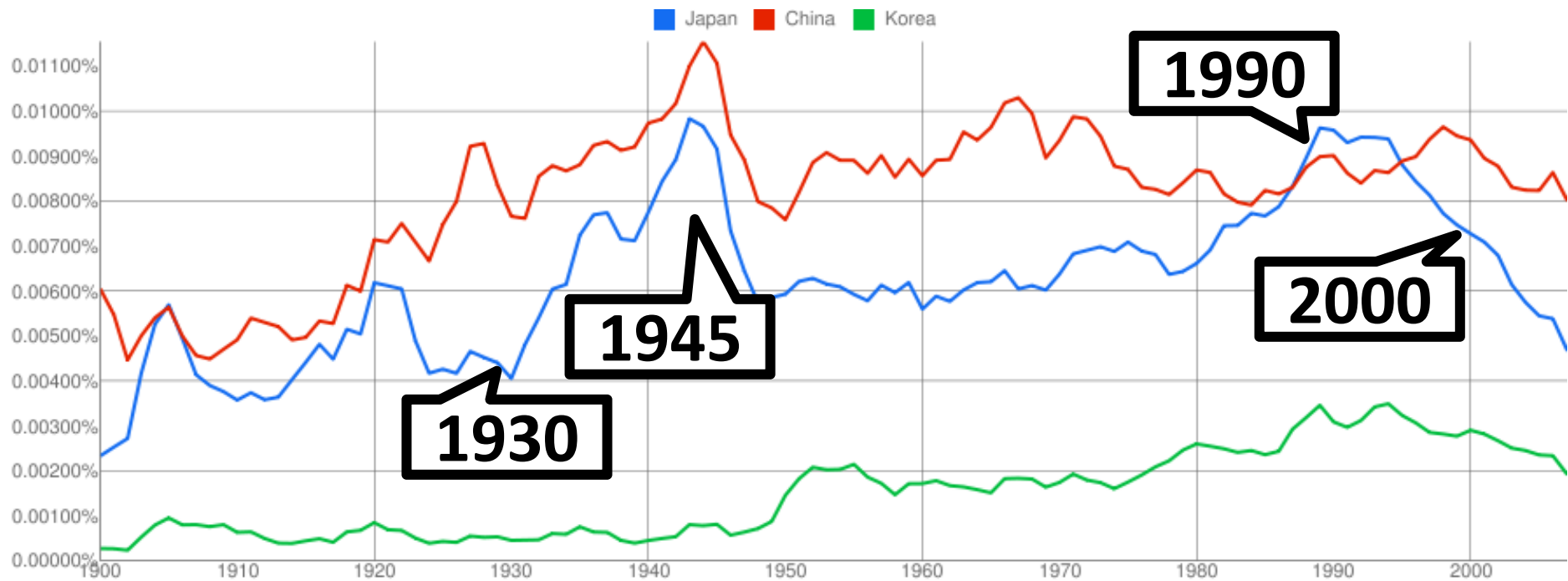
日本研究の現状(2)

- “日本リテラシー”・日本専門家が介在しない情報要求
 - 日本研究の多様化(国際化・学際化、連携・共同)
 - “非”日本研究者・“非”日本専門家へのリーチ
 - 日本研究の層の厚くない地域
日本司書のサポートのない研究者・学生
 - web環境下でのユーザ自身によるオーダー
→ユーザ・ILL担当者のみへのサービス態勢
- × 知る人ぞ知る情報発信・資料提供
- 汎用的・普及した国際的プラットフォーム

図①

日本離れが止まらない

Google Booksでの ■ Japan 登場頻度

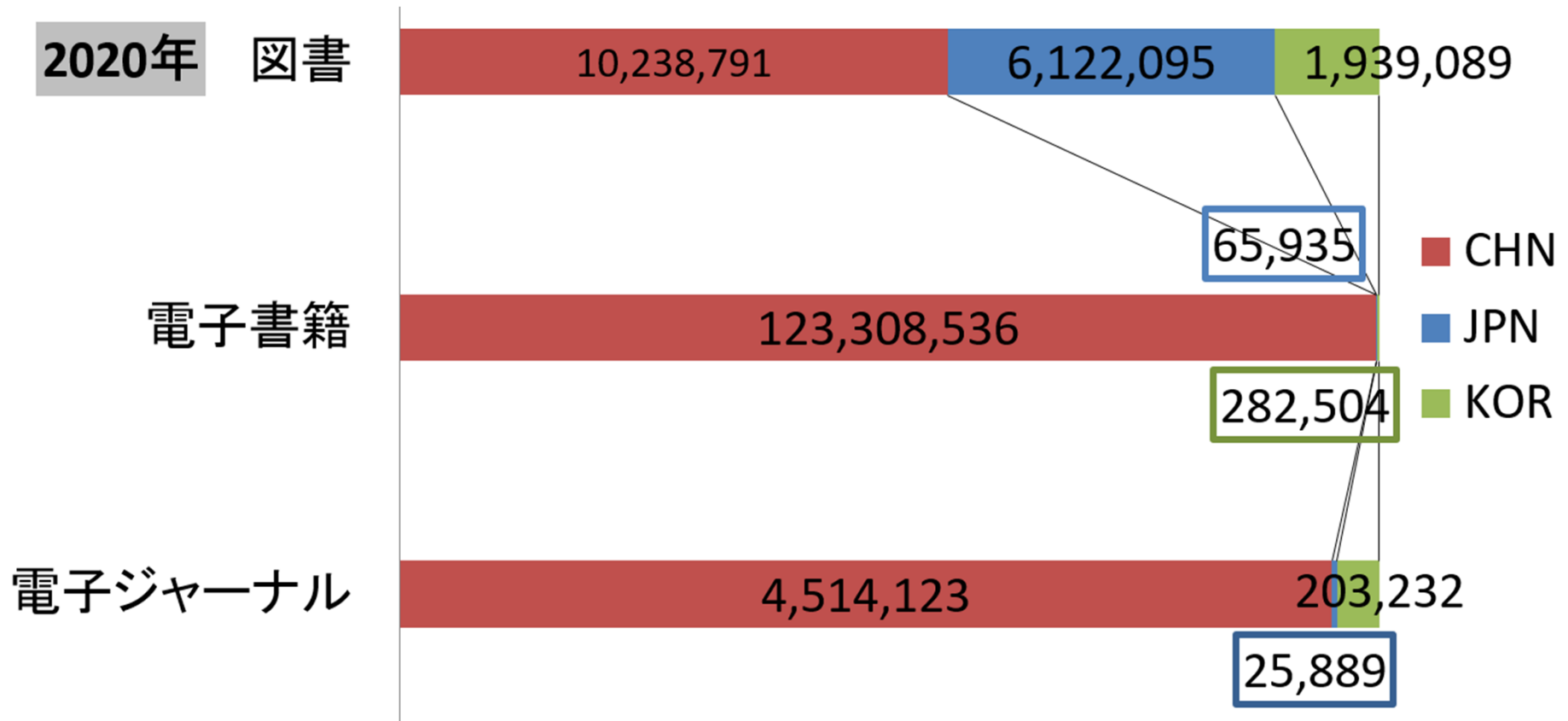


注: Google Books Ngram Viewer
(<https://books.google.com/ngrams/>) を利用し、phrase
「Japan」「China」「Korea」、year「1900-2008」、corpus
「English」で作成したもの。グラフの縦軸は出現頻度。

図②

深刻なデジタル格差

北米・東アジア図書館での 図書・電子書籍・電子ジャーナル所蔵数



注：北米・東アジア図書館での所蔵数(2020)。各グラフとも左から中国語・日本語・韓国語の順。Council on East Asian Libraries Statistics. (<https://ceal.ku.edu/>)から作成。41館対象。



3. OCLC参加の実際



概要(再)

- 国際日本文化研究センターは2018年より、
 - OCLC WorldCatでの目録情報の公開を開始。
 - OCLC WorldShare ILLへの参加による海外ILLの本格的な受付サービスを開始。
- この事業のねらいは、
 - 海外からのILL受付を、海外の機関・ユーザにとってスムーズな方法で受け付ける。
かつ、日文研にとって負担の無い方法で実現する。
(資料提供環境の改善)
 - 日文研所蔵資料の書誌・目録情報について、海外からのファインダビリティ/ディスカバリティを向上させる。
(情報発信による可視化・アクセスの強化)
 - 日文研の“海外への研究協力機能”を強化する。
かつ、日文研のプレゼンスを上げ、意義を再認識させる。



OCLCとは

- Online Computer Library Center
- 世界規模の図書館サービス機関
(非営利・メンバー制)
- 172カ国/地域の72000以上の図書館が参加
(北米が中心)
- WorldCat＝総合目録
(書誌レコード4億、所蔵レコード26億)
- WorldShare ILL＝相互貸借・文献複写
(56ヶ国、1万館以上、年間700万件)



Why “OCLC”?

- 世界規模のILLシステムで、対象館が膨大。
 - 世界の多くのユーザが検索する総合目録。
(ファインダビリティ/ディスカバリティ)
 - 検索も依頼も、ユーザはすでに慣れている。
日本資料でも特別扱いしなくていい。
 - 料金のやりとりがスムーズで、紀伊國屋書店
が日本側代理店として機能している。
- 国・分野を越えて、日文研と世界をつなぐ
“インフラ”になれる。



検討と実現までの経緯

- 資料課・研究資料委員会での検討・提案
- 海外ユーザ、ライブラリアン等との相談・ニーズ調査（EAJRS・NCC等の海外出張時）
- 紀伊國屋書店OCLCセンターとの相談（2016年5月頃から）
- OCLC 欧州アジア部署からの提案で、大量目録の一括登録が実現
- 財務課との相談・調整



実績 @WorldCat(初年度)

	日文研の 書誌件数	WorldCat登録 書誌件数		エラー
図書	294,708	既存書誌	124,995	1
		新規書誌	169,712	
雑誌	8,176	既存書誌	4,218	
		新規書誌	3,958	
合計	302,884		302,883	1



実績 @WorldShareILL(2022年度)

全依頼	459件		
受付	199件(43%) [\$2093.20]	複写	135件 [\$313.56]
		貸出	36件 [\$756.17]
		全頁複写	28件 [\$1023.47]
謝絶	260件(57%)	所蔵無し	131件
		自国内にある	43件
			…他



得られた効果

- 検索可能となった蔵書に対し、海外からの日々の問い合わせメールや閲覧依頼が増えた。
- 海外ユーザのニーズの実際を確認できた。
(分野、中国語・韓国語、電子化公開等)
- 作業負荷が軽減した。(IFM、OPAC連携等)
- 海外ILL受付に生じる、実際のコストやトラブルについての知見を得た。(トラブル軽減へ)
- 日文研の存在と意義を広報できた。
(CEAL・EAJRS等で好評を得た)
- 日文研側のシステムにローマ字形とOCLC番号を登録できた。(国際的な連携の可能性)



のこされた課題

- 不適切・無駄な依頼が多い。(重複書誌等)
- 毎年のWorldShareILL参加料、WorldCat目録追加登録料の負担をまかなう。
(ILL料金への反映?)
- WorldShareILL以外の受付も引き続き必要。
- より多くの国内機関・大学図書館による同様の取り組みを促す必要がある。
- 電子書籍化・デジタルアーカイブ化の推進が急務である。(例:NDLデジタル送信)